

選考委員選考所感

(敬称略・氏名五十音順)

対話の姿勢、「届け切る」手ざわり感

いとう ゆかこ
伊藤 裕香子朝日新聞東京本社
経済部長

ネット空間には、たくさんの情報があふれている時代です。必要と思う情報を、誰に、どのようにして届け切るのか。企業だけでなく私たちメディアにも、日々問われている難しいテーマです。

受賞企業に共通していたのは、多方面にわたる対話の姿勢にあると感じました。トップや経営層、工場など現場の思いをくみ取る。何よりも、お客さまや株主、多くの人に、知ってもらいたいという熱意があるかどうか。企業側が発信したいことと受け取る側にとって知りたいことが、一致しているとも限りません。その上で記者に正しく理解してもらって、ニュースや記事を通じて「届け切っている」かどうか。何か一つが欠けても、広報だけが頑張っても、空回りしてしまいます。

コロナ禍の影響がずっと続いた1年でしたが、悩みながら、工夫しながら取り組まれた手ざわり感のある広報の成果が、それぞれの応募用紙にはぎっしり詰まっていました。

困難な時こそ実力が試される

これ えだ ざとし
是 枝 智読売新聞東京本社
経済部長

企業広報大賞、企業広報経営者賞は共に接戦でした。自社の特徴を示そうと創意工夫した経営者、広報部門が多かった証しだと思います。

コロナ禍は人々の生活様式、ビジネスのありようを大きく変えました。脱炭素化やDXの取り組みも喫緊の課題です。逆風の中で、いかに企業理念や経営方針を明確に打ち出せたかが、選考のポイントになりました。

大賞に選ばれたエーザイは、長年にわたり「ヒューマン・ヘルスケア」を理念に掲げ、専門性の高い医薬品に関する知見を地道に伝えてきた点が支持を集めました。

安川電機の小笠原浩社長のように、地方に拠点を置きながら、情報を積極的に発信していくトップが増えることを願っています。

もっとも、広報は自社のPRが仕事だと誤解されては困ります。広報の本質は危機管理です。困難な時こそ、実力が試される。それを忘れないことが、「攻めの広報」につながるのではないのでしょうか。

活力ある広報、コロナ後の武器に

たか はし てつ し
高橋 哲史日本経済新聞東京本社
編集 政策報道ユニット
経済部長

新型コロナウイルスがもたらした未曾有の危機に見舞われた1年でした。企業は社会にどう貢献すべきか、なぜ存在するのか。社会と企業をつなぐ広報の役割は、かつてなく高まったと思います。

自分たちの存在意義を示せなければ社会の中で居場所を失ってしまうかもしれない。各賞の候補となった企業や経営者の皆さんの広報活動からは、そんな必死さがひしひしと伝わってきました。

今回の危機で、企業の広報力は強まったのではないのでしょうか。審査に参加させていただいた率直な感想です。生き残りをかけた自己主張のぶつかり合いが、企業と社会の接点を広げ、広報を鍛えたように感じます。

私は今年の4月まで中国に駐在していました。かの国ではもちろん、自由な広報は存在しません。短期的にそれが危機の克服に役立つ面があるのは事実です。

しかし、厳しい言論統制は長い目で見れば社会の活力を奪います。自由で独創的な広報が、コロナ後の世界では強力な武器になると信じてやみません。

「自社ならではの」の要素を打ち出して

にし むら こう た
西村 豪太東洋経済新報社
『週刊東洋経済』
編集長

ESGの重要性が自明であるだけに、大企業のメッセージは似通ったものになりがちです。だからこそ、「その企業ならではの」の要素は何かが問われます。

企業広報大賞を受賞したエーザイは「ヒューマン・ヘルスケア」という理念の下、ESGを重視した広報を続けてきました。特にアルツハイマー病についてメディアへの情報発信を継続的に行ってきたことが、「アデュカヌマブ」の暫定承認に際して結実したといえます。博士号保有者が広報部員の3割近いという充実した体制も評価できます。

企業広報経営者賞については、地方、地域からの発信を重視して選考しました。ほかの委員からも同様の声が聞かれ、石坂産業の石坂典子代表取締役は文句なしの受賞だったと思います。ダイオキシン騒動による危機を乗り越え、里山再生などで地域の信頼を醸成したプロセスは中堅企業にとって広報のモデルケースになり得ると考えました。

企業広報功労・奨励賞の選考では、個々の企業だけでなく業界のための情報発信という面も重視しました。どうしても「功労」に目が向きがちですが、「奨励」もまた大事です。新たなアプローチに挑む若手広報パーソンの登場に期待したいと思います。

逆風下でこそ情報発信を

にしむらともこ
西村知子

テレビ東京
報道局ニュースセンター
副センター長兼経済部長
WBS統括プロデューサー

かつて経験したことのないコロナ禍での1年、企業は何をどのように発信すればいいのか、広報担当の皆さまは迷ったり、悩んだり、大変な苦労があったかと思います。そんな状況の中で、人々が知りたい情報や役に立つ情報の積極的な発信、また暗くなりがちな日々を少しでも明るくしたいという強い思いが伝わる広報活動も目立ちました。逆風下での努力や挑戦に心より敬意を表します。

今回受賞された企業や経営者、広報担当の皆さまは、コロナ前より積極的な情報発信に努め、その経験と蓄積がコロナ禍の際立った広報活動に結び付いたのだと思います。選考に当たっては、企業が直面した苦境や課題をオープンにすることで、マイナスをプラスに変える力も評価しました。

制限がある中での経済活動は当面続きそうです。一方で、制限があるからこそ、新しいものが生まれるともいわれます。新しい時代の“広報のあり方”に期待しています。

地に足が着いた地道な広報を

ふじえだかつじ
藤枝克治

毎日新聞出版
『週刊エコノミスト』
編集長

コロナ禍で企業広報の出番は増えたのだと思います。新しい働き方や、新しい商品・サービスが求められ、企業の発信力が問われています。おそらく広報の仕事は忙しくなったでしょう。

一方で、皆同じような取り組みを発表し、マスメディアも1年前とほとんど変わらない報道を続け、読者や視聴者は食傷気味だと思いません。

そうした中で、企業広報大賞を受賞したエーザイは、認知症の新薬承認というだけでなく、日頃の地道な広報活動で、記者向けの勉強会をはじめ多くの人を対象に啓発活動を続けてきたことが高く評価されました。

石坂産業は、産業廃棄物というネガティブに捉えられがちな事業を、循環型社会の象徴として、地域に開かれた取り組みを長年続けてきたことが共感を呼びました。

いずれもコツコツと積み上げてきた活動が花開いた形です。地に足が着いた日頃の取り組みの重要性を認識させる選考会でした。

積み重ねこそ力

ひらちおさむ
平地修

毎日新聞東京本社
経済部長

今回の審査で私が着目したのは「継続力」です。企業広報大賞に選ばれたエーザイは、アルツハイマー病の治療薬開発で注目を集めていますが、日頃から科学や医療担当記者らを対象に勉強会を開催するなど、長年にわたる地道な広報活動が各メディアによる的確かつ正確な報道につながっているのだと感じました。それは企業広報経営者賞や企業広報功労・奨励賞を受賞された皆さまにも共通しています。

長期にわたるコロナ禍で、様々なコミュニケーションの機会が失われ、日常の広報活動に影響を及ぼしていることは間違いありません。そんなときだからこそ、これまでの地道な広報活動の積み重ねが重要な意味を持つのではないのでしょうか。

継続的な広報活動には確固たる企業理念が必要です。コロナやデジタル化などで大きな変化を迎えている今だからこそ、揺らぐことのない理念の下に力強いメッセージを発信していただきたいと思っています。

時代を切り拓く行動力と広報力

ふじさわくみ
藤沢久美

シンクタンク・ソフィアバンク
代表

今年の企業広報賞の選考会では、新しい風を感じました。これまで、企業の広報担当者やメディアの方々との長期にわたる関係から見いだされた功労を加味する空気がありましたが、今回はその空気は薄く、時代を変えていく先導者となるような企業広報担当者や経営者に高い評価が与えられました。

世界では、このコロナ禍にいかなる行動をするべきかを「Great Reset」というキーワードで議論が進められていますが、企業広報賞における視点も、過去をリセットし、社会に対し、新たな価値や行動を体現しているかが重視されました。そして、その評価軸は、企業の所在地や企業規模、過去の受賞実績といった軸よりも強く優先され、未来を切り拓くための活動に積極的に取り組み、様々なステークホルダーとのコミュニケーションを行っている企業が表彰されることとなりました。

社会の価値観の変化、企業の進化と共に、企業広報賞も変化しています。